



オランダを代表する建築家ヘルマン・ヘルツベルハー氏(中央)によるデザイン・ワークショップの講評風景(右端が筆者、1980年1月)



トリノで開催されたCIPA(文化遺産の記録・保存・利用の国際組織)のシンポジウムでコア・メンバーと筆者(左端、2005年10月)

組んでいる。カンボジアのアンコール遺跡、レバノン、タイの遺跡、奈良・新薬師寺の十二神将立像(写真参照)、ルーブル美術館のミロのビーナ

近年、国際学会や海外のワークショップでの発表や、海外の文化遺産のレーザー計測が増えたため、外国に行く機会が多くなった。海外のすぐれた研究者や技術者と英語でコミュニケーションができることは、米国に留学できたことの多大な恩恵といえよう。また、MITの文化の中で過ごした経験は、他にまねのできない技術を開発して新しいビジネスを創り出す姿勢を育んでくれたと思う。そして、人生の若い時期のある期間を外国で暮らすことによって、その国をより深く理解するだけでなく、世界の中における日本や、世界の他の国々についても、広い視野から見るができるようになったと思う。

建築設計・都市計画から ビジュアルライゼーションへ

帰国後は鹿島建設に入社し、同社の建築設計本部で建築の設計や都市デザインの仕事に携わった。国内の建築設計のほか、東南アジア、北アフリカなど海外の建築や都市開発のプロジェクトにも参加した。鹿島建設の都市や集合住宅の設計において、MITで学んだハウジングの理論や手法が大いに役に立った。

その後、建築CADのベンチャー企業として一九八七年にスタートした株式会社キヤドセンターに参加して、建築設計、景観設計、コンピュータグラフィックス(CG)、映像制作、バーチャルリアリティ(VR)などの業務に携わった。近年は、三次元地図の自動生成、VR表示装置などの技術開発にも関わっている。ここで開発した技術は、VRや三次元GIS(地理情報システム)関連のコンテンツ、ソフトウェア、およびハードウェアとして商品化し、ビジュアルライゼーション事業を推進するこの会社における主要事業の一つに成長している。現在では、会社の事業対象分野は建築、都市計画、不動産、防災、観光、展示、報道、教育、エンタテインメントなどに広がった。

近年、国際学会や海外のワークショップでの発表や、海外の文化遺産のレーザー計測が増えたため、外国に行く機会が多くなった。海外のすぐれた研究者や技術者と英語でコミュニケーションができることは、米国に留学できたことの多大な恩恵といえよう。また、MITの文化の中で過ごした経験は、他にまねのできない技術を開発して新しいビジネスを創り出す姿勢を育んでくれたと思う。そして、人生の若い時期のある期間を外国で暮らすことによって、その国をより深く理解するだけでなく、世界の中における日本や、世界の他の国々についても、広い視野から見るができるようになったと思う。

世界の人人々との コミュニケーション

スをはじめとして、建造物、遺跡、彫刻など、国内外の多数の文化遺産のレーザー計測を行い、三次元のデジタル化、ビジュアル化を推進している。



協力：新薬師寺、元東京藝術大学・長澤市郎教授

MIT留学で得たもの

国際文化教育交流財団第四回生（一九七九年度）。一九七六年東京大学工学部建築学科卒業。一九七八年同大学院修士課程修了後、同博士課程の途中で一九七九―八一年米国マサチューセッツ工科大学（MIT）建築・都市計画学部大学院留学（SMArchS取得）。一九八二年より鹿島建設で建築設計、都市デザインなどに従事した後、一九八八年より株式会社キヤドセクター。二〇〇三年より立命館大学COE推進機構教授を兼務。

キヤドセクター取締役
デジタルアーカイブ・ラボ所長
立命館大学COE推進機構教授

高瀬 裕

たかせ ゆたか

MIT建築・都市計画学部 建築学科に所属

MITの建築学科は一八六五年に設立された米国で最初の建築学科である。その大学院で私が属したのはMaster of Science in Architecture Studies（取得学位：SMArchS）の一通り建築家の教育を終えた者が主要な新しい建築の理論や手法を学ぶことを主眼とするプログラムであった。学年の総勢は三〇名程度だったと思う。ヨーロッパ、アジア、北米など世界中から各国につき一、二名を選ぶ方針で集めたため、多彩な国籍の学生で構成されていた。

留学先をMITに決めた最大の理由は、ジョン・ハブラーケン教授の存在であった。ハブラーケン教授は、一九六〇年代半ばからオランダのSARという研究組織で新し

いハウジング（集合住宅）の設計手法を提唱していた人である。教授は当時、アイントホーフェン工科大学からMITに招かれて建築学科長の職にあった。SARの手法は、工業化構法を利用したハウジングの設計に「サポート」と「インフィル」という新しい概念を導入するものであった。すなわち、建物の骨格である基本構造部「サポート」は一〇〇年単位の長期にわたって使用できるように設計する。これに対して、居住者が決められる内装などの非構造部「インフィル」については、変化する居住者の多様なライフスタイルに対応できるように、変更可能な余地を最大限に確保しようとする手法である。

留学前は、日本における工業化建築のパイオニアとして知られる東京大学の内田祥哉教授の研究室に在籍していた。そして、

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三カ国の大学・大学院へ一六四名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三五カ国四二九名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

当時からハブラーケン教授の研究に注目していた。このような設計概念はその後の日本でも進化して、近年の例でいえば大阪ガSNEXT21（内田祥哉＋集工舎建築都市デザイン研究所）や都市再生機構のSI（スケルトン・インフィル）住宅などとして実現している。

留学当時のMITで、ハブラーケン教授はハウジングの理論と手法を都市のデザインに拡張しようとしていた。それは、多数の街区が集合したスケールにおいて、多様な空間を統一感のある街並みとして実現するための設計手法である。一九八一年の夏休みには一〇人の学生を集めてこの理論の実験的な設計プロジェクトを行い、私も参加した。その時の経験は、後に携わった都市計画や集合住宅の設計においてたいへん役に立った。

当時でもMITの学内には最先端のコンピュータ・ネットワークが整備されており、いたるところでコンピュータを利用することができた。このように自然にコンピュー